「全人類皆殺し大作戦-前編-」

―二稿―

2025/5/27

脚本 太郎

〈人物表〉

春野　紡	（15）	中学三年生
霧崎　宴	（15）	中学三年生。殺人犯
島田　凛	（15）	中学三年生
霧島　詩	（40）	霧崎家の母
霧崎　祭	（16）	霧崎の兄
高城　充	（45）	詩の内縁の夫

1.　校舎裏（夕）

雨による水溜りがチラホラある。
リュックの中身がぶちまけられている。
春野紡（15）、落ちている泥だらけのノート類を、一つずつ拾ってはタオルで拭い、リュックにしまっている。
春野、苛々した様子で、しきりに何かを呟いたり舌打ちしたり地面を足で踏み叩いたりしている。
猫の鳴き声。
校舎の壁に寄りかかるように猫がまどろんでいる。
春野、卑屈な笑いを浮かべる。
近くに落ちていた掌ほどのサイズの石を拾い、

春野　「嬲らせろ」
猫に近付いていく。
直後、上空から霧崎宴（15）の声。

霧崎の声「あ、やば」
春野、ビクッとして立ち止まる。
春野の足元のアスファルトに島田凛（15）が頭から落下する。激突音。
春野、さらにビクッとして石を落とす。
血がアスファルトに広がっていく。
猫が逃げていく。
春野、二階を見上げる。
霧崎、二階の窓から顔をのぞかせている。

霧崎　「誰かと思えば三組のいじめられっ子担当の春野くん」
春野　「そう言う君は二組のいじめられっ子担当の霧崎さん」
霧崎　「こんな時間までいじめの後片付けとは大変ですな」
春野　「そっちこそよく分からないけど大変そうな状況だね」
霧崎、ハッとして、
霧崎　「あそうだ、今の見てた？」
春野　「さすがに見てないとは言い難いかな」
霧崎　「あらら。てか二階から突き落としただけで人って死ぬんだね。意外」
春野、困ったように島田の死体を見て、

春野　「そりゃ頭からアスファルトに落ちればね」
霧崎　「うわ脳味噌出てんじゃんぐっろ。でも勉強になったな」
春野　「随分高い勉強代が付きそうだけど」
　霧崎、春野を伺うように見ている。
霧崎　「誰かに言う？」
　春野、目を逸らす。
春野　「い、言わないよ」
　霧崎、疑わし気な視線を春野に向ける。
　やがて右手を上げる。ナイフを握っているのが露わになる。
　一瞬の沈黙。
　霧崎、ナイフの柄を口に咥え、窓枠を乗り越える。
　春野、振り向いて全力で逃げる。
　霧崎、窓枠に両手でぶら下がる。
　手を離して落下。島田の死体の上に着地。骨の砕ける音。
　ナイフを右手に持ち、全速力で春野を追っていく。

2.

街・路地裏（夕）

　春野、壁に両手をついて直立不動。霧崎はその後ろに立ち、ナイフを春野の首筋に突き付けている。
霧崎　「ほんじゃ」
　霧崎、ナイフを僅かに振りかぶる。
春野　「いやストップストップ」
霧崎　「いや青春の日々に立ち止まってる暇なんてないっつーか」
春野　「青春というにはあまりに血生臭すぎるって。頼むから殺さないで」
霧崎　「残念ながら目撃者は消すっつーのが有史以来恒例のルールなんですな」
春野　「そんなぁ」
霧崎　「でもまあ可哀そうだし、辞世の句詠む時間くらいはあげても良いよ」
　霧崎、ナイフの位置を戻す。
春野　「いや詠まないよそんなの。それよりぼくの話を聞いて。

（早口に）良いかい？　第一に二人殺せば罪の重さも跳ね上がる。第二にぼくが君を告発するメリットはないしたがって他言無用上等」

霧崎、訝し気な表情で少し考える様子。

春野　「第三に日本のお巡りさんは優秀だからどうせすぐバレる。ＯＫ？」

霧崎、不可解そうな表情。

霧崎　「……え何、今のが辞世の句？」

春野　「詠んでない詠んでない！　詠んでたとしたら字余りすぎだろ」

霧崎、先ほどより大きくナイフを振りかぶる。

霧崎　「じゃ改めて、斬首行きます」

春野　「いや首落とすつもりなのかよナイフじゃ絶対不可能だって」

霧崎　「吾輩の辞書に落とすという言葉はない」

春野　「じゃあその辞書ただ落丁してるだけだってぇ」

霧崎がナイフを振り下ろす。

春野、目を瞑って絶叫。

数秒後、恐る恐る目を開ける。

ナイフは彼の首筋スレスレで止まっている。

霧崎　「と言いたいところなんだけど……まあ君はわたしと近い境遇だし？　共犯になってくれるなら生かしといてあげても良いよ」

春野　「共犯って……もしかしてまだ誰か殺す気？」

霧崎　「イエス」

春野　「具体的に誰を？」

霧崎　「誰っていうか……まあ、全員」

春野　「は？」

霧崎　「全人類皆殺し大作戦っつーか」

春野、しばし言葉に困る。

春野　「なんか、君がいじめられてる理由の一端が見えた気がするよ」

霧崎がナイフを振りかぶる。

春野　「うわ嘘嘘、参加させていただきますその大作戦」

霧崎、ナイフをピタリと止める。
嬉しそうな笑顔でナイフを仕舞う。
霧崎「本当？　良かった。わたし一人でもできるだろうけど、二人いた方が何かと便利だもんね」
春野、振り返りながら、
春野「まあ正直、二人でも絶対不可能だと思うけど」
霧崎「……えっと、吾輩の辞書に正直という言葉はない」
春野「その辞書捨てた方が良いよ」

3.　霧崎家・外観（夕）

住宅街の片隅にある平凡な二階建ての一軒家。
霧崎、玄関扉のノブに手をかける。後ろには春野。

4.　霧崎家・玄関（夕）

霧崎と春野、玄関扉から入室。
春野、強張った顔で、
春野「お邪魔しま……す」
玄関の壁にもたれ、スウェット姿の中年男性高城充（45）が、ビール瓶を抱いて、豪快ないびきをかいて寝ている。
春野「え、絵に描いたような完全に泥酔したおじさんだ」
春野、霧崎を伺うように見て、
春野「お……お父さん？」
霧崎「君にお父さんと呼ばれる筋合いはない」
春野、頭を抱えて、
春野「頼むよ一回くらいまともにコミュニケーション取ってくれよ」
霧崎「……うん」
霧崎、高城に目を向けて、
霧崎「ただいま、お父さんと入れ替わっていつの間にか家に住み着いてたよく分かんない謎のおじさん」
春野「何者なんだよ」
霧崎、靴を脱いで玄関に上がり、
霧埼「何者でもないけど強いて言うなら逃走中の盗撮犯の可能

性が濃厚」

春野　「え？」

霧崎　「まあまあ、細かいことは良いから。上がって上がって」

霧崎、後ろ向きに両手で手招きをして廊下を進んでいく。

春野　「細かくないし、そっちは良くてもこっちが良くないんだけど」

と渋りつつも、春野、恐る恐ると言った様子で靴を脱ぎ、霧崎についていく。

春野　「ていうか、何？　この臭い……」

5.　**霧崎家・ＬＤＫ前（夕）**

入口にはドアがない。

霧崎が立ち止まる。

春野も止まる。

霧崎、リビングを覗く。

6.　**霧崎家・ＬＤＫ（夕）**

ダイニングテーブルの上にはいつのか分からない料理の残りと食器が放置されていて、蠅がたかっている。

キッチンにも食器が山済みで蠅がたかっている。

霧崎詩（４０）、リビングの隅で御神体のようなものに土下座をしている。

詩　「わたしが全部悪いんです。謝りますからどうか許してください、助けてください、あの男を殺してください」

霧崎の声「ただいま、かつてお母さんだった何か」

詩　「わたしは存在不適格の生存無資格者という身でありながらこの世に生まれ落ち４０年生きるという大罪を犯しました」

詩、頭を思いきり床に叩き付ける。大きな音がする。

7.　**霧崎家・ＬＤＫ前（夕）**

春野がビクッとなる。

8. 霧崎家・ＬＤＫ（夕）

詩　「できるだけ苦しんで自殺することをお約束しますのでどうか我が家をお救いください。豚に犯されながら身体に火をつけて眼球をえぐり出して鼻から食べます」

詩、さらに頭を床に思いきり叩き付ける。さっきより大きな音。

血が飛び散る。

詩　「だから我が家をお救いください。背徳精霊嘲罰般若様、お願いです。どうか我が家をお救いください」

9. 霧崎家・ＬＤＫ前（夕）

霧崎、春野を見て、

霧崎　「ねえこれどう思う？」

春野　「振るなよノーコメントだよ怖いから」

10. 霧崎家・階段（夕）

霧崎、階段を上がっていく。春野、後に続く。

11. 霧崎家・祭の私室の前（夕）

ドアは開きっぱなし。

霧崎祭（１６）と数人の不良少年たち、テレビゲームをしたり、スマホをいじっている。部屋は散らかっており、酒の空き缶にたばこの吸い殻が突っ込まれたものが散らばっている。

祭、チラリと霧崎たちの方を見るも無言。

少年Ａ「妹帰ってきてんじゃん」

祭　「おう」

少年Ｂ「一緒にいるの誰だ？」

祭　「知らね」

12. 霧崎家・霧崎の私室

霧崎と春野、入室。

霧崎、ベッドに座る。

霧崎　「まあ適当に座ってよ」

春野、椅子に座る。

春野　「お兄さんには挨拶しないんだ」

霧崎　「あれは兄貴未満の何か」

春野　「未満の何か？」

霧崎　「兄貴にも満たない兄貴と似て非なる何かしら。兄貴ダッシュ。兄貴にはあとニポイント程足りない」

春野　「そう聞くとなんか惜しい感じするな」

少年Ａの声「妹、なんか今日全然ビビってなかったな」

祭の声「ああ。あとでキツめに締めとくか」

少年Ｃの声「またションベン何人分飲ませられるかで賭けようぜ」

祭の声「いいな」

少年たちの馬鹿笑い。

春野　「足りないのニポイントどころじゃない感じだけど大丈夫？」

霧崎　「大丈夫なわけないでしょ」

春野、霧崎の方を見る。

霧崎、憎悪の表情。

春野　「そりゃそうか」

春野、納得した顔で頷く。

続く